

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10478

研究課題名（和文）医療ニーズのある子どもの親の子育て観に基づくケア・サービスモデルの開発

研究課題名（英文）Developing a healthcare and service model based on the child-rearing values of parents of children with medical complexity

研究代表者

松澤 明美（Akemi, Matsuzawa）

北海道大学・保健科学研究所・准教授

研究者番号：20382822

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、病気・障がいのある子どもの父親・母親の子育て観を明らかにすることである。Q方法論による3つの研究を実施し、母親は、1. 子どもを中心に子育てや家事だけではなく自身のことも充実させたい、2. 病気・障がいのある子どもの子育ては大変なので自分を整えて向き合いたい、父親は、1. 妻とともに病気・障がいのある子どもを育て、楽しみながら成長したい、2. 病気・障がいのある子どもの子育ては大変だけど、妻を守り仕事も大切にしたいという、それぞれ2つに分類される子育て観をもっていたことが明らかになった。本研究の成果から、父親・母親の子育て観に基づくケアサービス提供のあり方を検討し、モデル案を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は病気・障がいのある子どもを育てる父親と母親それぞれの子育て観を、Q方法論を用いて明らかにした、わが国では初めての研究として位置づけられる。本研究のアウトカムである「子育て観」は、子育てに関する複数の価値を階層的・総体的な優先関係をもとに体系化しているため、その測定は難しい。そのため、本研究はこれらの親の子育て観の解明に向けて、Q方法論を用いてアプローチし、父親・母親それぞれの子育ての多様な価値観を明らかにすることができた。本研究で得られた知見は、病気・障がいのある子どもの親への子育て支援に向けて、その支援のあり方、ケア・サービス提供を検討するうえでの重要な視点を提供すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the child-rearing values of Japanese fathers and mothers raising children with disabilities. We conducted the three studies with the Q methodology. Two different child-rearing values of mothers were revealed: 1. mothers want to live a child-centered life, but value not only child-rearing and housework, but also the things they want to do, and 2. mothers want to prepare themselves to face the challenges of raising a child with a disability. Two different child-rearing values of fathers were revealed: 1. fathers want to cooperate with their mothers to raise their children with disabilities in a way that is good for them, and 2. fathers cannot leave the task of raising children with disabilities to their mothers because it is too difficult. Based on the results of this study, a proposed healthcare and service model based on the child-rearing values of fathers and mothers raising children with disabilities was developed and presented.

研究分野：小児看護学

キーワード：障がい児 家族 親 子育て観 ケア・サービス

1. 研究開始当初の背景

近年、わが国では病気・障がいのある子どもが増加している。特に、医療的ケアを必要とする子どもは、この 10 年間で約 2 倍、そのうち人工呼吸器を要する子どもは約 12 倍と急増している (中村, 2019)。これらの家族は、健康な子どもを育てる親と比較して、子育てする生活上、さまざまな困難を体験し (松澤, 2021)、精神的健康度や (Yamaoka, 2015)、Quality of Life (QOL) が低い (Matsuzawa, 2022)。それゆえに、これらの家族への支援は、急務の課題となっている。

これらの家族支援のあり方について、主要概念である家族中心ケア・サービス (Family-Centered Care & Services) を踏まえて考えると、親が主体的に子どもを育て、これらの子どもを含む家族としての生活を構築できるよう支援することが重要である。そのためには、これらの親自身がどのように子育てしたいのか、つまり親の「子育て観」は重要な意味をもち、それに基づく支援が必要と考えられる。

子育て観とは、「子育て全般に対する価値観や信念、親役割感、育児生活への印象」 (陳, 2006) とされており、1960 年代から複数の学問領域で子育て支援や文化比較を目的とした研究が蓄積され、健康な子どもの親の子育て観と子どもの発達、育児不安への影響等が多数報告されてきた。一方、病気・障がいのある子どもの親の子育て観に直接、焦点を充てた研究は、国内においては、就学中の重度障害児の母親 29 人を対象とした質的研究 (鈴木, 2009)、2 組の重症児の親を対象とした事例研究 (藤本, 2001) の 2 つの研究のみであった。また、わが国において、病気・障がいのある子どもと家族に対する公的ケア・サービス提供は、徐々に拡大し、整備されてきているが充分ではなく、またこれらの子どもと家族のケア・サービス利用に関する研究は遅れている現状にある。それゆえに、これらの親の子育て観に基づくケアサービスモデルを検討することは、重要な課題と考えられる。

加えて、育児に関する複数の価値を階層的・総体的な優先関係をもとに体系化した子育て観は、その測定が難しい。現存している子育て観尺度は、健康な子どもの親を対象としており、それらでは、病気・障がいのある子どもの親の子育て観は必ずしも捉えきれないと考えられる。そのため、これらの親の子育て観の測定に向けては、方法論的な工夫が必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は近年、病気・障がいのある子どもの親の子育て観 (Child-rearing Value) を明らかにし、それを踏まえた子どもと家族へのケアサービスモデルを開発することである。そのため、価値観測定の手法の 1 つである Q 方法論 (Q-Methodology) (Watts & Stenner, 2012) を用いて、これらの親の子育て観を明らかにする。

Q 方法論は、質的・量的研究方法 (Quali-Quantitative Methods) と位置づけられる、個人や組織の内面にある捉えづらいつい価値観等を定量的に測定する分析方法である。具体的には、あるテーマの価値観が書かれた複数枚のカードを準備し、それらを最も重要視するものから最も重要視しないものまで、価値観同士を比較して並べ替えることで測定し、統計的手法を用いて分析する。

3. 研究の方法

本研究は、Q 方法論により病気・障がいのある子どもの母親・父親、それぞれの子育て観に関する下記の 3 つの研究を実施した。

研究 1 : 病気・障がいのある子どもの母親の子育て観の測定

研究 2 : 病気・障がいのある子どもの父親の子育て観の測定

研究 3 : 病気・障がいのある子どもの母親の子育て観オンラインワークショップの実施と評価

研究 1 : 病気・障がいのある子どもの母親の子育て観の測定

病気・障がいのある 1 歳以上、概ね 20 歳までの子どもを育てる母親を対象として、Q 方法論により子育て観を測定した。

Q 方法論の手続きとして、子育て観の測定に必要な Q ステートメント (テーマを測定する複数枚の価値観が書かれたカード) Q グリッド (カードを並べるピラミッド型のマトリックスの表) (図 1) を作成のうえ、研究対象者へ Q 分類を依頼し、データ収集した。

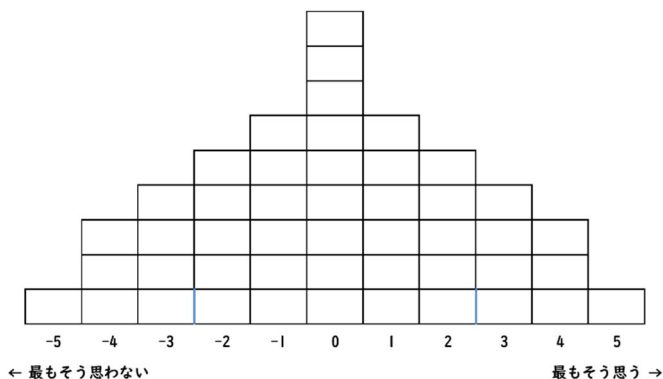


図 1 本研究で母親の子育て観測定に使用した Q グリッド

具体的には、Q 分類で用いるステートメントの作成にあたっては、まず医学中央雑誌データベース Web 版と国立情報学研究所学術情報ナビゲータ CiNii を用いて「障がい児」「母親」「子育て」のキーワードにより、母親の子育てに関する文献を検索した。732 文献から本テーマに関連する 174 文献を精読し、母親の子育てに関する記述から 768 ステートメント案を作成し、6 カテゴリーに類型化した。そのうえで、抽出されたステートメント数および本研究で使用する Q グリッドを踏まえて 47 ステートメントを選択した。研究者間で複数回の校正とパイロット調査（病気・障がいのある子どもの母親 4 人およびこれらにかかわる保健医療福祉専門職 6 人）への Q 方法論による子育て観の測定）の結果を経て（松澤，2019）、最終版のステートメントを完成させた。各項目は 1 枚ずつ名刺大のカードに記述した。

研究対象者の母親に対し、Q 分類を依頼し、個別に収集したデータを得点化して因子分析・主成分分析を実施し、Q マッピングにより可視化した。分析は、Excel マクロを組み込んだ PQMethod ソフトウェアを用いた。

研究 2：病気・障がいのある子どもの父親の子育て観の測定

病気・障がいのある 1 歳以上、概ね 20 歳までの子どもの父親を対象として、Q 方法論により子育て観を測定した。Q 方法論の手続きとして、子育て観の測定に必要な Q ステートメント、Q グリッドを作成のうえ、研究対象者へ Q 分類を依頼し、データ収集、分析した。

具体的には、Q 分類で用いるステートメントの作成にあたっては、まず医学中央雑誌データベース Web 版と国立情報学研究所学術情報ナビゲータ CiNii を用いて「障がい児」「父親」のキーワードで父親の子育てに関する文献を検索した。300 文献から本テーマに関連する 70 文献を精読し、父親の子育てに関する記述から 445 ステートメント案を作成し、12 カテゴリーに類型化した。そのうえで、抽出されたステートメント数および本研究で使用する Q グリッドを踏まえて 47 ステートメントを選択した。研究者間で複数回の校正とパイロット調査（病気・障がいのある子どもの父親 10 人への Q 方法論による子育て観の測定、そのうち、7 人へのインタビュー調査）の結果を経て、最終版のステートメントを完成させた。各項目は 1 枚ずつ名刺大のカードに記述した。

研究対象者の父親に対し、Q 分類を依頼し、個別に収集したデータを得点化して因子分析・主成分分析を実施し、Q マッピングにより可視化した。分析は、Excel マクロを組み込んだ PQMethod ソフトウェアを用いた。

研究 3：病気・障がいのある子どもの母親の子育て観オンラインワークショップの実施と評価

研究 1 の対象者のうち、参加を希望する母親に対して、母親の子育て観に基づくオンラインワークショップを実施し、評価した。方法は、ワークショップ終了後、参加者に対して、Web アンケートを実施し、満足度や参加して感じたこと・考えたことなどの自由記述を求めた。

4．研究成果

研究 1：病気・障がいのある子どもの母親の子育て観の測定

研究協力者は、病気・障がいのある子どもの母親 23 人であり、子どもは 2～26 歳、医療的ケアを要する子どもを含む重症心身障がいや知的障がい、発達障がいのある子どもであった。

Q 分類の結果を分析した結果、「病気・障がいのある子どもがふつうに暮らす」「大変な子育てに自ら向き合う」「子育てや家事に加えて自分のやりたいこともしたい」「子育ての基本は母親そして家族である」の 4 つの特徴が抽出された。個別の Q 分類の得点をマッピングした結果、これらの母親は【子どもを中心に子育てだけではなく、家事や自身のことも充実させたい】（Factor1）【病気・障がいのある子どもの子育ては大変なので、自分を整えて向き合いたい】（Factor2）の 2 つのグループの子育て観に分類されることが明らかになった（図 2）。

本研究の結果、これらの母親は異なる 2 つの子育て観をもち、最も多かった子育て観は、子育てや家事だけではなく、自身のことも充実させたいという子育て観であった。一方、子育ての基本は母親という伝統的子育て観は抽出されなかった。

現代の母親は子育て期においても就労割合も高いが、これらの母親は、子育てと就労を含めた自身のやりたいことの両立は難しいことも多い。また子育ての大変さから、自らの健康の保持を重視していた。それゆえに、これらの母親のもつ子育て観を踏まえた支援が必要であることが示唆された。

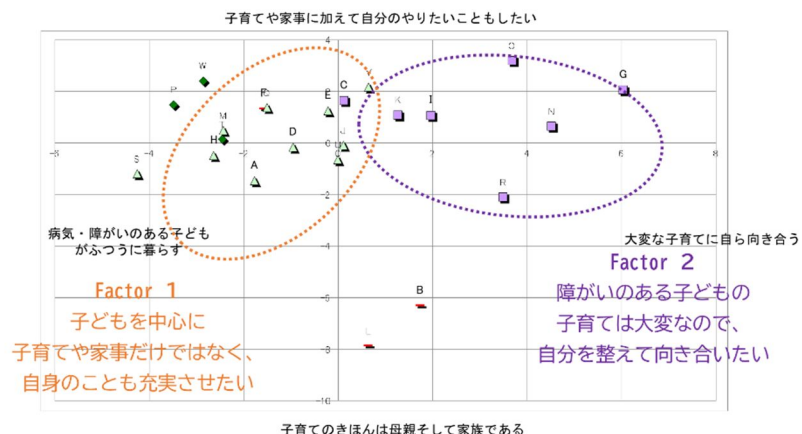


図2 Qマッピングによる病気・障がいのある子どもの母親の子育て観(n=23)

研究2：病気・障がいのある子どもの父親の子育て観の測定

研究協力者は、病気・障がいのある子どもの父親33人であり、子どもは2～23歳、医療的ケアを要する子どもを含む重症心身障がいや知的障がい、発達障がいのある子どもであった。

Q分類の結果を分析した結果、「病気・障がいのある子どもを夫婦でともに育て、親も成長する」「病気・障がいのある子どもの子育てから距離をとる」「父親として仕事も家庭も大事にする」「家族のことは自分たちで支えあう」の4つの特徴が抽出された。個別のQ分類の得点をマッピングした結果、これらの父親は【妻とともに病気・障がいのある子どもを育て、楽しみながら成長したい】(Factor1)【病気・障がいのある子どもの子育ては大変だけど、妻を守り、仕事も大切にしたい】(Factor2)という2つのグループの子育て観に分類されることが明らかになった(図3)。

本研究の結果、病気・障がいのある子どもの父親は、異なる2つの子育て観をもっていたが、いずれのグループにおいても、父親自身が実際に子育てするものという考えをもっていた。双方の子育て観ともに、母親と協力して子育てしたいという、母親との関係性を重視した考えを前提としていたが、その協力体制により異なる子育て観をもっていた。それゆえに、これらの父親のもつ子育て観を踏まえた支援が必要であることが示唆された。

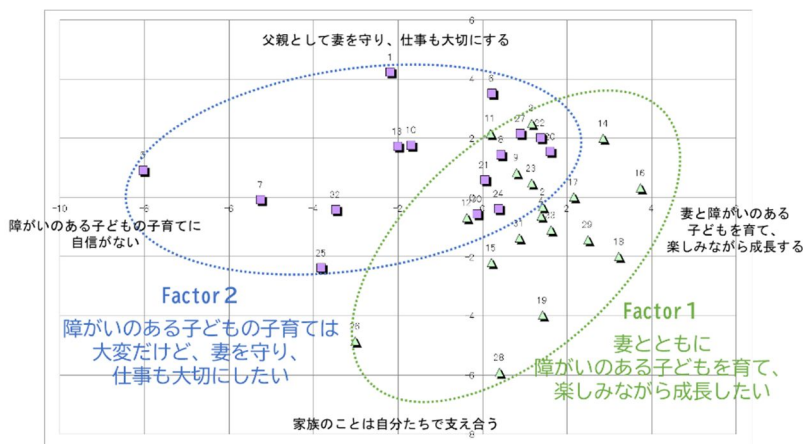


図3 Qマッピングによる病気・障がいのある子ども父親の子育て観(n=33)

研究3：病気・障がいのある子どもの母親の子育て観オンラインワークショップの実施と評価

研究1に参加した母親に対して、ワークショップの開催・募集を周知し、12人の参加者が参加した。

本ワークショップの参加者は、事前に個別に子育て観に関するQ分類法を依頼し、実施してもらった。本ワークショップは、グループを基盤としたワークショップであり、子育て観の結果から、子育て観が類似した複数の母親とファシリテーターが1つのグループとなって、自らの子育てとそれに基づく子育て観について話し合った(図4)。



時間	内容
120分	オリエンテーション 本ワークショップのねらい・ゴール・内容についての説明
10分	自己紹介 参加者・ファシリテーター・運営関係者、全員の自己紹介
15分	カードワークの結果 Q方法論を用いてとらえた母親の子育て観の報告
15分	グループセッション 各グループで3つの問いに沿って子育て観について話し合う
40分	まとめ 各グループのファシリテーターから話し合った内容の報告 参加者による感想の共有
30分	参加者への御礼・アンケートのお願い
10分	

図4 病気・障がいのある子ども母親の子育て観オンライン・ワークショップの概要(n=12)

本ワークショップ終了後、参加者に対して、Web アンケートを実施し、回答した母親9人を対象として評価した。本ワークショップに参加して満足できたかでは「満足できた」55.6%、「まあまあ満足できた」44.4%、本ワークショップを家族や友人・知人に勧めたいかでは「勧めたい」66.7%、「まあまあ勧めたい」33.3%であった。

また、本ワークショップに関する意見の自由記載から、参加者は【子育てする自分の価値観をみつめなおすことができた】

【他の人の考えに触れて刺激を受けた】【いい時間を過ごすことができた】【グループワークの運営方法にさらなる工夫が必要】と感じていた(表1)。これらの母親は、本ワークショップを肯定的にとらえており、また自分をもつめなおし、自分の価値観やその特徴を認識する機会と感じていた。今後は本手法の効果がより発揮される方法の工夫、多面的かつ精度の高い効果測定による評価が課題である。

表1 障がいのある子ども母親の子育て観オンライン・ワークショップの評価(n=9)

コアカテゴリー	サブカテゴリー
子育てする自分の価値観をみつめなおすことができた	自分をもつめなおすことができた
	自分の価値観の特徴に気づく
	自分が大切にしたいことを認識する
他の人の考えに触れて刺激を受けた	他の人の考えに触れてよかった
	他の人の考えが参考になった
いい時間を過ごすことができた	つながることの意味を感じた
	参加できて楽しかった/ おもしろかった
	次の機会も参加したいと感じた
グループワークの運営方法にさらなる工夫が必要	少人数/ファシリテーターがいて話しやすかった
	グループのわけ方に工夫が必要
	グループワークでの質問が難しかった

本研究成果の統合

本研究の結果、わが国の伝統的な子育て観とは異なる病気・障がいのある子どもの母親、父親、それぞれ2つの子育て観が明らかになった。これらの母親は、子育てのみではなく、子どもを中心としながらも、自身のやりたいことも充実させたいという価値観をもっていた。現代の母親は、女性の社会進出に伴い、子育て期においても就労する割合も高くなってきている。さらに、これらの母親の子育て期間が、健康な子どもの子育てより長期に及ぶ可能性があるとき、これらの母親の子育てと母親自身のことが両立を支援することが重要と考えられる。またこれらの父親はいずれの子育て観においても、父親は子育てするものと認識し、それゆえに、父親もまた子育て・家庭と仕事の両方を大切にしたいと考えていた。そのため、これらの父親の仕事と子育ての両立を支援する視点が必要であると考えられた。

またこれらの父親は、いずれの子育て観においても、母親との関係が重要であった一方、母親の子育て観では、父親との関係は重要視されていない可能性が示唆された。それゆえに、父親・母親それぞれへの夫婦協同子育て(コ・ペアレンティング)の支援の必要性が示唆された。

さらに父親・母親の子育て観から、それぞれの立場での子育ての大変さを感じていることも明らかになった。特に母親では、自らの健康の保持のためには、支援や対処行動を重視していることが示唆された。そのため、子育てする父親・母親の健康の支援がより必要性であることが示唆された。

本研究1・2で得られた知見を踏まえ、「病気・障がいのある子どもの父親・母親の子育て観に基づくケアサービスモデル(案)」(図5)を作成した。

本研究の知見によって検討した本ケアサービスモデル(案)について、検討を重ね、モデルの精度を上げていくこと、さらに社会実装に向けた研究の蓄積が今後の課題と考えられる。

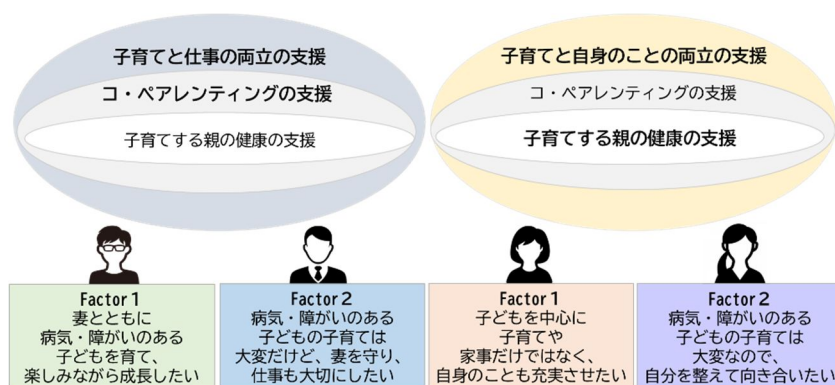


図5 病気・障がいのある子どもの父親・母親の子育て観に基づくケアサービスモデル案

引用文献

- Matsuzawa A., Arai J., Shiroki Y., et al (2022): Healthcare for children depend on medical technology and parental quality of life in Japan, *Pediatr Int*, **64**(1), e15006.
- Watts Simon, Stenner Paul (2012): *Doing Q Methodological Research -Theory, Method and Interpretation*.
- Yamaoka Y., Tamiya N., Moriyama Y., et al (2015): Mental Health of Parents as Caregivers of Children with Disabilities: Based on Japanese Nationwide Survey, *PloS one*, **10**(12), e0145200.
- 松澤 明美, 白木 裕子, 新井 順一, 他 (2021): 医療的ケアを必要とする子どもの親が子育てのなかで体験している困難, *小児保健研究*, **80**(1), 75-83.
- 松澤 明美, 眞崎 由香, 吉澤 剛 (2019): 在宅で生活する医療ニーズのある子どもの母親の子育て観 Q 方法論による予備的研究, *茨城キリスト教大学看護学部紀要*, **10**(1), 3-12.
- 中村 知夫 (2019): 医療的ケア児に対する小児在宅医療の現状と将来像, *Organ Biology*, **27**(1), 21-30.
- 陳 東, 森 恵美, 望月 良美, 他 (2006): 乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発: 信頼性・妥当性の検討, *千葉看護学会誌*, **12**(2), 76-82.
- 藤本 幹, 八田 達夫, 鎌倉 矩子 (2001): 重症心身障害児を育てる両親の育児観の分析と家族援助のあり方についての考察, *作業療法*, **20**(5), 445-456.
- 鈴木 真知子 (2009): 在宅療養中の重度障害児保護者の子育て観, *日本看護科学会誌*, **29**(1), 32-40.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松澤明美・吉澤剛・眞崎由香・鳥本靖子	4. 巻 82(2)
2. 論文標題 障害のある子どもの母親の子育て観オンラインワークショップの実践と評価	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 184-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松澤明美	4. 巻 -
2. 論文標題 在宅生活する障がい児と家族にかかわる相談支援専門員の実践の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松澤明美・眞崎由香・吉澤剛	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 在宅で生活する医療ニーズのある子どもの母親の子育て観：Q方法論による予備的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城キリスト教大学看護学部紀要	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 松澤明美・吉澤剛・鳥本靖子・眞崎由香・佐藤奈保
2. 発表標題 障がいのある子どもの父親の子育て観：混合研究法を用いた予備的研究
3. 学会等名 第69回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akemi Matsuzawa, Go Yoshizawa, Yasuko Torimoto, Yuka Masaki, Naho Sato
2. 発表標題 Comparing child-rearing values among fathers and mothers raising children with disabilities in Japan using Q-methodology
3. 学会等名 26th East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松澤明美・吉澤剛・眞崎由香・鳥本靖子
2. 発表標題 病気・障がいのある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップの実践と評価
3. 学会等名 第69回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akemi Matsuzawa, Go Yoshizawa, Yuka Masaki, Yasuko Torimoto
2. 発表標題 Child-rearing values of Japanese mothers raising children with disabilities using Q-Methodology
3. 学会等名 7th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松澤 明美
2. 発表標題 在宅で生活する障がいのある子どもと家族へケア・コーディネーションを行う相談支援専門員の体験
3. 学会等名 第68回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松澤明美・眞崎由香・鳥本靖子
2. 発表標題 日本における母親の子育て観に関する概念分析
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Akemi Matsuzawa, Yuka Masaki, Yasuko Torimoto-Sasai
2. 発表標題 Mothers' child-rearing values and research methodology in Japan: A literature review
3. 学会等名 14th International Family Nursing Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松澤 明美, 眞崎 由香, 鳥本 靖子
2. 発表標題 障がいのある子どもを育てる父親の子育て観に関する文献検討
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松澤明美
2. 発表標題 在宅生活する医療的ケア児と家族へのケア・サービス提供モデルに関する文献レビュー
3. 学会等名 第44回日本重症心身障害学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松澤明美・眞崎由香
2. 発表標題 在宅生活する医療ニーズのある子どもの母親の子育て観：Q方法論による予備的研究
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鳥本 靖子 (Torimoto Yasuko) (90566241)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究科・准教授 (32206)	
研究分担者	眞崎 由香 (岩永由香) (Masaki Yuka) (30633185)	茨城キリスト教大学・看護学部・講師 (32101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------